

令和4年度 学校評価結果について

南井上小学校

1 はじめに

本校の学校教育目標は、「**人権を尊重し、温かい心情と創造性豊かな知性を持ち、自主的精神に満ちた、心身ともに健康な児童を育成する**」である。

めざす学校像 <育つ学校=楽しい学校> を、

- (1) 子どもが育つ学校 → 行きたい学校
- (2) 保護者が育つ学校 → 行かせたい学校
- (3) 教職員が育つ学校 → 勤めたい学校 と、

めざす子ども像を、

- (1) 健康で明るくたくましい子ども → 「すこやか」な子ども
- (2) よく考え進んで活動する子ども → 「かしこい」子ども
- (3) 素直で思いやりのある子ども → 「やさしい」子ども とし、

教職員・保護者等に明示し、学校教育活動全体をとおして具体的な取組を進めてきた。

今年度、『学校教育目標の達成にむけて』**三者一覧表**（以下、「**三者表**」という。）を作成し、児童はもちろん、保護者も教職員も一丸となって児童のあるべき姿を追求していくことにした。

そして、学校評価にあたっては、三者表を十分に生かし、

- ・児童には、『めざすこと』が達成できているか、
 - ・保護者には、我が子が『めざすこと』を達成できているか、
 - ・教職員には、児童が『めざすこと』の達成に向けてどれだけ手だてを講じることができたか、
- をアンケート調査した。

アンケートは、回答者のものごとのとらえ方やその時の気分等で結果が左右されるが、だいたいの傾向をつかむことはできる。そこで、この評価結果を分析し、今後の学校経営や学級経営に役立てることとする。

(1) アンケート回答数

児童 (381) 保護者 (362) 教職員 (22) 学校運営協議会委員 (5)

(2) アンケートの分析方法

各質問項目に対し、「よくあてはまる」「ややあてはまる」を**肯定的意見**、「あまりあてはまらない」「ほとんどあてはまらない」を**否定的意見**としてとらえた。

学校教育目標の達成度合いについては、「令和4年度 努力目標」に基づく三者表の視点から、児童・保護者・教職員それぞれの結果をつき合わせて判断した。

(3) 令和4年度 努力目標

(1) 健康で明るくたくましい子の育成		
○体をきたえる	○よりよく食べる	○命を守る
(2) よく考え進んで活動する子の育成		
○話を聞く	○宿題（自主学習）をする	○本を読む
(3) すなおで思いやりのある子の育成		
○あいさつをする	○なかよくする	○整理整とんする

2 アンケート結果

アンケートの結果は、「**学校評価アンケート結果（三者一覧表）**」となった。

3 アンケート結果から（別紙参照）

4 改善方策

A めざす子ども像

(1) 健康で明るくたくましい子の育成

①体をきたえる

- ・教育活動として、体育科の授業や放課後体育の活動は教師主導で場作り等を進めていく。
- ・学校生活として、休憩時間においても体を動かすよさを授業とつないで伝え、一人ひとりの心身の状況に応じながら勧めていく。
- ・家庭生活においては、児童が家庭で家族と一緒に取り組みやすい体づくり（ウォーキングやジョギング、なわとび、ニュースポーツなど）を継続的に啓発していく。

②よりよく食べる

- ・食育は、特定の教科学習ではなく、教科横断的に、また、教育活動全体を通じて行う。
- ・知識としてのよりよく食べるよさを、給食指導において実践する場としていく。
- ・食の指導においては、1)食事の重要性、2)心身の健康、3)食品を選択する能力、4)感謝の心、5)社会性、6)食文化の、六つの視点からより具体的なものとしていく。

③命を守る

- ・地方別子ども会の班による集団登校が安全な登校の土台となっている。保護者・地域と現状を共有し、支援を安全に関する校区の社会状況に応じたものにしていく。
- ・下校、放課後等の安全については、安全な歩行や自転車運転についての知識・技能を高め、児童自身による安全な生活力を高める。
- ・交通安全・防犯・不審者対応について、警察やスクールガードリーダー、地元防犯協会、南井上子どもを守る会等と連携し、環境向上に取り組む。

(2) よく考え進んで活動する子の育成

④話を聞く

- ・本校の1年生は20前後の就学前施設から入学してくる。知らない者同士の仲間づくりは、本校教育の土台である。その第一歩として、話を聞く力の育成を位置づけていく。
- ・個別指導の必要な児童への支援について、情報共有を確実に行う。
- ・聞く力の獲得を話す力の育成へとつなぎ、思考力・判断力・表現力の向上を推進する。

⑤宿題（自主学習）をする

- ・児童の学習への興味・意欲を引き出す一つは「わかる・できる授業」である。宿題（自主学習）への主体的な取組も同様である。今後も授業改善に取り組む。
- ・授業の質と同様に、学び合う集団づくりが学力向上への土台である。児童一人ひとりの学習状況の把握に努め、個と集団が伸びる授業づくりを推進する。
- ・個別指導の必要な児童への支援について、情報共有を確実に行う。

⑥本を読む

- ・教師の指導のもとでの読書、教室での読み聞かせを一層推進し、児童の読書機会の確保に努める。
- ・名東文庫の充実を柱に、児童の読書への興味・関心を高める。同時に、図書貸出活動を活性化し、家庭読書の日等、家読（いえどく）の推進を図る。
- ・読書習慣の形成に向けて、「勉強」という枠にとらわれない読書の効果を啓発する。

(3) すなおで思いやりのある子の育成

⑦あいさつをする

- ・日々、挨拶を繰り返し、挨拶が人と人のつながりの窓口であることを実感させ、主体的に挨拶する暮らし方の体得を通して社会性の育成を図る。
- ・家族へのあいさつから交通立哨の方へのあいさつへ、挨拶の社会化を家庭と連携して推進する。立哨の方にも声かけ協力を依頼していく。
- ・指導すると同時に、児童の成長を信じて、大人からの挨拶を届けていく。

⑧なかよくする

- ・ポジティブな行動支援を柱とした自尊感情育成の取組は、自分だけでなく他の人のよさを見つけ、受け入れ、認めるよりよい関係を構築することにつながっている。継続していく。
- ・保護者との、事実に基づく指導・支援の関係性を継続し、発展させていく。
- ・なかよくできない場面を、児童自身、児童相互に解決し、乗り越えていく指導について研究していく。

⑨整理整とんする

- ・成長目標「がんばろう ABC」推進のきっかけとなったトイレのスリッパ揃えは、人を思う心の育成の機会として、教員の課題意識とともに継続していく。
- ・みんなで使う物の整理整とん等から、公共の場での暮らし方の向上へとつないでいく。
- ・学校での集団生活で学ぶより良い暮らし方の一般化に努める。

B めざす学校像

⑩人権教育・特別支援教育

- ・児童一人ひとりを大切にすることが、本校教育の原点である。
大切にするには、児童への継続した、見る、聞く、話す、感じる等、五感を駆使した観察と評価を積み重ねていかねばならない。子どもに向き合う時間の確保が重要である。それには、個人のアナログな努力だけでなく校務システム等のデジタルのよさを導入したデータ活用を進めたい。

⑪生徒指導

- ・けんかやいじめ、仲間外し等は、人間が集団で生活する以上、避けては通れない諸問題である。これは、学校生活が学力向上だけでなく、社会性の向上も担っていることを意味する。その取組について、15%(約50人)の保護者が「わからない」とするのは、児童の成長が確約されていないのと同時に、学校の取組の一貫性や確かな根拠が感じられないからだと考える。学校－保護者の信頼関係を築きながら、より客観的で、より明確な生徒指導を推進する。

⑫学力向上

- ・授業は、先の生徒指導の正常化があってより効果的に行うことができる。生徒指導の正常化とは、何も問題が生じない、生じさせないことではなく、生じる問題を解決しながら前進していくことである。学力向上も同様で、教えてもらってわかるだけでなく、初めて出会った問題やわからないことを解決する力を育むことを大切にしたい。基礎・基本を着実に獲得しつつ、それを活用して問題を解決する主体的な学び方を高めていきたい。

⑬情報発信

- ・コロナ禍の3年間は、密の防止を感染対策の基本としてきたので、保護者が学校に集う機会が減少した。教育内容が見えにくいことで、不安や不信が募らないように、各担当からの毎月の学校だより・学年だより・保健だより・給食だよりに加え、校長室だより「くすっ子通信」や学校ホームページでの情報発信に努めた。また、まちこみメールでの配信では即時性・緊急性を重視した。情報発信は『開いて守る』学校づくりである。そして、情報収集には、毎日の教室訪問の他、学校・学年行事への参加が必須となり、教育内容を把握することにつながった。もちろん、不十分との声があることを改善への力としたい。

⑭教育公開

- ・コロナ禍における学校行事やPTA活動の在り方について、「学校の日常を守る」との方針を共有することに努め、理解と協力を得ることができた。アフターコロナにおいても、本校の状況を的確に把握し、PTAと連携しながら臨機応変に取り組みたい。

⑮説明責任

- ・学校教育目標の全家庭配布、めざす児童像のスローガン化、成長目標の継続的な呼びかけ等、学校教育活動のめざすものを明確に示すことは効果的である。継続したい。

⑩開かれた学校

- ・地域の教育的リソースの活用は、主体的に学ぶ児童の育成、社会に開かれた教育課程の創造になくてはならないものである。児童の安全・安心を確保しながら取り組んでいく。

⑪安全・安心，体づくり

- ・各家庭の新型コロナウイルス感染拡大防止への理解と協力に、心より感謝している。
- ・避難訓練等が分散型となったり、講師を招いての防犯教室等が実施できなかつたりした点、状況に応じて改善していく。夏季のラジオ体操やプール開放、冬季の持久走等についても、その必要性や家庭・地域との連携から実施について考えていく。

⑫楽しい学校

- ・級友や教職員とよりよく交流できる機会や場がある、自分が大切にされていることを実感できている、自分のやろうと思うことが実現できている、これらの評価が次問の「楽しい学校」の要因に表れている。一方、13%（約50人）の児童が否定的意見である。日々の授業、学級経営、保護者連携等において教育効果の向上を図り、児童－教職員、学校－家庭の信頼関係向上に努めていく。

5 アンケート結果の周知

アンケート結果を、保護者には文書並びに学校ホームページにて報告する。

6 おわりに

めざす学校（＝児童、保護者、教職員が育つ学校）を作っていくには、何ができて何が不十分なのか、現状分析と具体的な評価の積み重ねが重要だと考える。一層の研究を進めたい。

めざす学校像への評価では、保護者は、概ね8割を超える肯定的意見であるが、生徒指導への肯定的意見は低い。「わからない」も約15%である。漠然とした概念的な評価項目ではなく、客観的な評価としていく工夫が必要である。また、日頃の予防的な指導から、問題が生じた時の対応、さらには事後指導、それらの成果は児童の成長として表れるため大きいスパンでの評価も必要である。

教職員は、No.10~18 全ての設問において、肯定的意見が100%であった。これは、本年度の充実した教育実践の裏付けである。「チーム学校」等の組織で取り組む掛け声や「共通理解」等の職員間の意思疎通推進の言葉はよく耳目にするが、決して簡単なことではない。誰もが同じ方向に向かい、支え合い、補い合い、協力することができた成果が年度末の児童・学校の姿である。もちろん不十分さや課題はある。それを明らかにして次の目標設定に進みたい。

最後に、今年度から三者表を作成し、保護者にも理解と活用を案内した。その効果はいかかなものだろう。学校には、学校教育目標をはじめ、めざす児童像など、多くの目標があり、時には何に向かって取り組んでいるのか不明瞭になることがある。まずは目標の共有化から、児童育成への学校・家庭・地域の連携を進めていきたい。その時、何よりも児童の力を伸ばすことに全力を尽くすことで保護者は学校の取組を理解し、信頼感を深めていくと期待する。

今回の学校評価を通して明らかになった本校教育改善へのキーポイントは次のとおりである。

- より良い暮らし方の一般化（挨拶、交通安全、食事、整理整頓）
- 読書の生活化
- 保護者に伝わる人権教育・特別支援教育・生徒指導
- アフターコロナでの学校・家庭・地域の連携
- 学習指導の向上（「可視化」「ふり返り」「グループ活動」「思考力、判断力、表現力」）
- 生徒指導の推進（「自尊感情」「認め合い」「決まり」「自分で解決する」）
- 働き方改革

来年度も『開いた学校づくり』で、めざす児童像に向けて児童はもちろん、保護者や地域と連携して取り組みます。ご理解ご協力をよろしくお願いいたします。